

令和 4 年 6 月 15 日現在

機関番号：44413

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K02379

研究課題名（和文）教員の協働性を高める研修プログラムの開発と効果の検証

研究課題名（英文）Developing a training program to improve teachers' collaboration and its efficacy study

研究代表者

網谷 綾香（AMITANI, AYAKA）

大阪成蹊短期大学・幼児教育学科・教授

研究者番号：90404110

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、多忙な教育現場においてより効果的・効率的に「協働性」を高めるために、新たな教員研修プログラムを提案した。研修で使用する教材は、教師の葛藤状況を取り上げたシミュレーションゲームである。既存の教材「クロスロード 教育相談編」の改定に加え、今回は「クロスロード チーム学校編」を新たに作成し、この教材を用いた教員研修を実施した。事後アンケートの結果から研修プログラムの効果を検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研修プログラムの効果として、多様な他者の意見に触れ自身の考え方の幅が広がること、協働性に対する気づきが得られることなどが明らかとなった。本プログラムは、学校現場や教員養成段階で実践することが可能であり、教員間の対話を促し、立場の異なる者同士の相互理解を深めることができる。校内研修等で用いれば、校内の協働的な関係性を構築することが期待できる。

研究成果の概要（英文）：This study developed a new teacher training program to improve “collaboration” in busy educational settings. The new program used a simulation game illustrating conflict situations faced by teachers as teaching material. We revised the existing teaching materials “Crossroad-educational counseling” and developed the new teaching material “Crossroad-school as a team.” Teacher training was conducted using these materials, and their efficacy was verified using a post-program questionnaire survey. The teaching program’s efficacy included the following. The participants’ perspectives widened by listening to others’ opinions, and they became more aware of collaborating. We suggest using this program in school settings and teacher training to promote communication among teachers and deepen mutual understanding between people with different standpoints. Using the program for in-school training and other activities could contribute to building collaborative relationships in schools.

研究分野：教育臨床心理学

キーワード：教員 教師教育 協働性 チーム学校 研修教材

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

今日の学校現場では、生徒指導や教育相談、特別支援教育といった複雑で多様な課題が山積している。教員は様々な期待を背負い業務に追われ、従来から指摘されている教員の多忙化は依然として改善されず長時間労働が常態化している。こうした教育課題の多様化と教員の多忙化への対策として、文科省（2016）は「学校現場における業務の適正化」に乗り出し、事務職員や専門スタッフ等が学校運営や教育活動に参画していく「チーム学校」の実現を図っている。今日の教員は、他職種も含めチームの一員として積極的に協働していく力がより一層強く求められている。

協働とは「異なる立場に立つ者同士が、共通の目標に向かって、限られた期間内に互いの人的・物的資源を活用して、直面する問題の解決に寄与する対話と活動を展開すること」（亀口、2002）とされる。協働の阻害要因については、これまでに校内の組織体制の不整備、教員と他職種の役割分担・業務内容の不明瞭性、時間的制約などが指摘されてきたが、相互の専門性理解が不十分であることの影響を指摘する研究も多い。相互理解については事例研究でもさかんに取り上げられ、共にケースに対応する中で葛藤しつつ時間をかけて信頼関係が築かれ協働可能なチームが作り上げられる過程も報告されている。しかし、多忙化の中で様々な課題に即時に対応しなくてはならない教育現場では、より効率的に協働性を促す新たな試みが求められる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、教員の協働性を高めるための研修プログラムを開発することにある。研修用のツールとして導入したのは、シミュレーションゲーム「クロスロード」の手法を用いた教員向けの研修教材である。「クロスロード」はもともと、矢守ら（2005）が防災対応シミュレーションゲームとして開発した手法であり、現在では他領域でも幅広く活用されている。

網谷（2015）は、教育相談や生徒指導等の領域における教員の力量形成を目的として、「クロスロード 教育相談編」を作成した。この教材では、教員が学校で出会いそうな36の葛藤場面が問題カードで提示される。クラス担任や養護教諭、教育相談担当者、管理職など様々な立場の教員が教育相談や生徒指導の場面で陥りやすい葛藤場面が用意されており、参加者はそれぞれの立場になったと想定して判断を行う。

もともとこの教材は個々の教員の教育相談的課題への対応力を高めることを狙った教材であったが、他者との対話による相互作用を通して、自らの考え方の偏りへの気づきや価値観の広がりが得られることや、異なる立場の視点に立つことでお互いの理解が促進されるといったような効果が確認されており、教員間の協働を高めるためにも有効であると考えられる。

また、当初はスクールカウンセラーなどの専門家が研修のファシリテーターとなることを想定して開発したが、本研究ではミドルリーダーや教育相談・生徒指導を担当する教諭など、協働のキーパーソンとなる教員を研修のファシリテーターに据えることも目指した。教員間の対話や相互理解促進を促す役目を研修で実際に担うことで、キーパーソン教員自身の協働力を養うことができるのではないかと考えたためである。

以上をふまえ本研究では、既存の「クロスロード 教育相談編」の改良版を作成した上で、協働性に着目した新たな教材を開発し、その効果を検証するとともに活用のあり方について提案することとした。なお、本教材の作成にあたっては、事前にオリジナルの「クロスロード」開発者の許可を得ている。

3. 研究の方法

（1）既存教材の改良とファシリテーター用手引きの作成

まず、「クロスロード 教育相談編」（網谷、2015）の改良を行うために、本教材を用いて教員対象の研修を2回実施し、対話の録音分析および事後アンケートにより「協働性」という観点から改良すべき点を調査した。その結果、36枚の問題カードのうち15枚程度のカードについて研修でのグループ内対話（ディスカッション）を促すために、問題文の改変が必要であること、また研修実施上のいくつかの工夫が必要であること明らかとなった。そこで、事後アンケートで得られた意見を参考に、現職の小学校教員およびスクールカウンセラーに協力を依頼して、より対話が深まるような内容へと改変を行った。さらに、教育相談担当者など「チーム学校」構築のためのキーパーソンとなる教員自身がファシリテーターとなり本教材を使用してもらうために、ファシリテーター用の研修実施の手引きを作成し冊子化した。改良した教材を使用して教育相談担当者・養護教諭を対象とした研修会を実施し、事後アンケートから研修プログラムの効果を検証した。

（2）新規教材「クロスロード チーム学校編」の作成

協働性に着目した新規教材を開発するために、既存の教材にはない立場の教員や、教員以外の職種（特別支援教育支援員、スクールカウンセラー、保護者など）の葛藤について取り上げた。葛藤場面の抽出にあたっては、様々な立場の教育関係者（現職教職員、スクールカウンセラー等）

にインタビューや質問紙による調査を行い、現場で経験している葛藤について挙げてもらった。その中から典型的と考えられる場面を選択し問題カードに設定した。また、「教育相談編」の問題カードの中から協働性に関わるものを一部抽出し、新たに作成した問題カードと合わせて用いることとした。さらに、協働関係の構築という観点から、ポジティブな葛藤を扱った事例を導入するなどの工夫を行い、「チーム学校編」の試行版を完成させた。試行版で取り上げた葛藤場面が教育現場でのリアルな事例となっているかどうかについて、心理職や現職教員による確認を行った。この試行版を用い、幼・小・中・高・特別支援学校の教員を対象とした研修プログラムを実施し、事後アンケートにより研修効果を検証した。

4. 研究成果

(1) 既存教材「クロスロード 教育相談編」については、改良によって学校現場でより使用しやすい教材となった。「チーム学校」を担うキーパーソンとなり得る教育相談担当者・養護教諭を対象とした研修会では、事後アンケートの結果から、参加者が校内研修等で本教材を用いることで協働性を高める可能性を十分に期待できると評価していることが明らかになった。

本研究で作成したファシリテーター用の手引きは、誰が読んでもその目的と実施方法が理解できるようになっており、実際に教員自身がファシリテーターとなって学校現場で活用されている。

(2) 新たに開発した「クロスロード チーム学校編」では、協働にかかわる教員の葛藤を扱った場面8枚（新採、メンター、教科担当、養護教諭、栄養教諭など）、多職種カード4枚（スクールカウンセラー、特別支援教育支援員）、保護者カード3枚を盛り込んだ。また、ポジティブな葛藤を取り上げたりお楽しみカードを導入したりするなどの工夫により、より楽しみながら安心して研修に参加できるように工夫した。

事後アンケートの結果の分析を通して、研修での体験が「今後の教育実践に役立てることができる」という確かな実感に結びついていること、教示通りにゲームに参加した者は、『協働性』に対する自分自身の考え方への気づきが得られることなどが確認された。また、どの年代の教員でも研修での体験やその効果に大差はないことが確認された。これは「クロスロード」という教材が、確実な正解のない状況を敢えて設定し提示していること、ごく短い問題文で構成され1つの場面でも様々な状況がシミュレーションできるという特徴を持ち合わせているため、どの年代であってもそれぞれの経験をもとに事例に向き合えるからであると考えられた。

(3) 本教材の実際の活用場面としては、第一に教員研修の場が挙げられる。具体的には①「チーム学校」構築に向けて校内教職員の対話を促すために校内研修で活用、②ミドルリーダーや教育相談担当、養護教諭など「チーム学校」のキーパーソンとなりうる人材の育成を目的とした研修会での活用（ここで研修を受けた教員が校内で①を実施することも可能）、③初任者研修や免許更新講習などキャリア発達を促す研修の場での活用などが考えられる。今回作成した教材では、多職種や保護者の葛藤カードを取り上げていることから、より「自分とは異なる相手の立場になって物事を考える」きっかけを提供できる。また、ゲームという安心できる枠の中での体験は、対話的關係を築くことの喜びと重要性の理解を促しうるものと考えている。

第二に、教員養成段階で「教職実践演習」などをはじめとした教職科目の演習の一部として用いることも可能である。実際の教育現場で生じるリアルな葛藤のシミュレーションができるため、未経験の学生が現場での「協働」について具体的に考える一助になるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 網谷綾香・岡本尚子・町支大祐・細川美幸	4. 巻 17
2. 論文標題 「学び続ける教員」のための教員研修のあり方とは？ プレイフルな研修の意義と課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大阪成蹊短期大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 21-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 網谷綾香	4. 巻 2
2. 論文標題 教員のメンタルヘルスの現状 職務効力感および指導困難な児童生徒との関わりに着目して -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大阪成蹊教職研究	6. 最初と最後の頁 66-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 網谷綾香・細川美幸・岡本尚子
2. 発表標題 教員の「協働性」を高める研修教材の開発 シミュレーションゲームを用いた教職キャリア発達支援の試み
3. 学会等名 日本キャリア教育学会第42回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 網谷綾香・岡本尚子・細川美幸・町支大祐
2. 発表標題 教員研修のあり方を模索する プレイフルな研修の意義と課題
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 網谷綾香
2. 発表標題 教師バーンアウトと職務上の力量・キャリア適応力の関連
3. 学会等名 学校メンタルヘルス学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 網谷綾香・川上泰彦
2. 発表標題 「協働性」を高めるための教員研修の実践 研修の効果と教職キャリアによる差異の検証
3. 学会等名 日本キャリア教育学会第43回研究大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	川上 泰彦 (KAWAKAMI YASUHIKO) (70436450)	兵庫教育大学・学校教育研究科・教授 (14503)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------